

## 二 大正・昭和初期の跡見女学校

### 1 学校の発展と充実

#### (1) 校舎の改築

明治四十年代に入る頃、跡見女学校を拡張する動きが高まった。当時跡見女学校の生徒数は増加の一途を辿り、明治二十一年（一八八八）柳町（現在の文京区小石川一丁目）に校舎移転した頃は一〇〇名前後であったものが、明治三十二年（一八九九）には二八六名、四十年には三一五名に増えていた。生徒数の増加に合わせて従来から部分的増改築が重ねられてきたが、今回は全面的な改築を意図したものであった。

学校の拡張と合わせて学校の改革、すなわち学校を跡見家の所有より移して財団法人とすることの相談会が明治四十年（一九〇七）十一月二十五日の校友会臨時総会で開かれ、千家尊福<sup>たかとみ</sup>、島田三郎らの委員から説明があった。学校としては明治四十一年四月に正式にこの件について決定した。

校舎の改築工事は明治四十三年（一九一〇）一月から始められ、四月に新しい跡見家住宅が校内に完成して校長と家族一同は新宅に移った。その跡地に寄宿舎の建設が始まり、翌四十四年（一九一〇）五月に竣工して寄宿生八七名は早速新寄宿舎に引き移った。部屋数は一二室から一四室に増えた。

寄宿舎に続いていよいよ校舎の建設に着手、明治四十四年頃には旧寄宿舎跡に校舎の一部が落成し早速習字教室と裁縫教室を使用して授業が行われた。さらに明治四十五年（一九一〇）三月までには雨天体操場が出来上がり、同月二十七日には創立以来最も多い八八名の卒業生を出した第二回卒業式の式場となった（早蕨<sup>さわらび</sup>舎）。

校舎全部は大正二年（一九一三）四月までに完成した。同月七日に始業式が行われたが、校舎が拡張されたことにより新入学生は初めて三組に分けられた。なお新築校舎の落成式は同年十月十七日

大正二年新築の校舎正面



に行われ、元田通信大臣ほか六百数十余名が参会した。こうして柳町校舎は当初の総建坪四三八坪に対して一二三〇坪に拡張し、跡見女学校としてまさに画期的な改築であった。

この間財団法人への組織替えも進み、大正二年



大正四年に制定された校服。前列の三人などの髪型は「ガバレット」

十一月二十一日に財団法人私立跡見女学校が認可された。最初の理事(いろは順)は原富太郎、橋本大吉、角田真平、跡見花蹊、同泰、同李子、島田三郎、監事は安田善三郎、増田義一、名誉顧問松尾臣善、渋沢栄一、千家尊福であった。

## (2) 校服の制定

開学当初跡見学校において生徒は紫紺袴を着用するよう定められていた(当時の皇后、後の昭憲皇太后の御内意と伝えられる)が、その袴に合せて着る着物については自由に任されていた。また明治三十二年(一八九九)四月には式の時に着用する黒木綿五つ紋の礼服が定められ、頭髮には大きなリボンをつんだ。袴は平常用の紫紺袴を着用した。

大正四年(一九一五)十一月十五日に、大正天皇御大典を記念して平常服の校服が制定された。その少し前、跡見花蹊は生徒の服装に関して次のように述べている。

生徒の服装や、装飾品などは、質素に質素にと申してをります。これは今までも随分やかましく申しましたが、年々世の中が贅沢に

なるに従つて、この方を一層やかましくする考へで、嚴重に「質素主義」を励行したいと考へてをります。（『をりをり草』）

新しい制服は、ゆかり織と称する木綿地（のちメリンス）、色は袴と同じく紫紺、羽織も同じであつた。袴は従来そのままとした。当時男子校では制服が一般だったが、東京の女子校では一校あるかないかという時代である。

### 跡見の紫は「いけえび（活海老）」色

跡見開校当時、皇后様（後の昭憲皇太后）の御内意により、紫袴を生徒に着用させ、この後、跡見の紫が世の注目を引くことになりました。その後、大正四年、大正天皇御大典を記念して制定された和服の校服の紫の色を花蹊先生は、「活海老」色と名付けられ、今日まで跡見独特の紫として伝わってまいりました。この「活海老」色とは、伊勢エビの背の深い紫色をたとえて花蹊先生が名付けられた色名ということで、日本の伝統色などの辞典には、この名は見あたらないと思われず。花蹊先生から李子先生、井上幸子先生、そして私へと言い継がれてきた色名で、特に花蹊先生の書物などには示されてはいないようです。

（板谷春子談）

校服を定めた理由は、右の花蹊の言葉にあるように世間の風潮とともに生徒の服装が次第に華美に流れつつあつたこと、したがって一定の制服を定めることにより勤儉の美德を養成することが不可欠と考えられたことに加えて、一般の女学校ではかつて海老茶袴が流行していたが、おいおいに減少して紫袴を用いる向きが増え、跡見生が識別しにくくなつてきたという事情もあつたようである。跡見の伝統が見失われることが憂慮されたのであつた。なおこの時には女子教員も無地の服を着用することが申し合わされたという。

頭髮については、乱れない髪型として生徒の髪型の中からいわゆるガレットが選ばれて、三年生以下で用いられることになった。大正七年（一九一八）のことである。ガレットとは、三つ編の髪を後ろで交叉して前に廻し、ピンで留める髪型である。

### (3) 高等女学校と同等の学力と認められる

女子教育に関する法的整備は遅れ、学校制度に関する規定の中に高等女学校の名が初めて登場したのは、明治二十四年（一八九一）十二月の中学校令改定の際であつた。高等女学校はこれによつて

尋常中学校の一種と規定された。

その後明治二十八年(二八九五)一月になってようやく独立の高等女学校規定が定められ、明治三十二年(二八九九)二月には高等女学校令が公布されるなど、高等女学校の法的整備は次第に進められていった。

しかし跡見女学校はこの規程によることなく、したがって公式には「私立高等女学校に類する各種学校」ということになっていった。したがって高等女学校とは別に、独自のカリキュラムを実施しうるという利点があった。ただそのカリキュラムも次第に高等女学校に近づいていったことも事実で、明治三十九年(一九〇六)の四月の規則改正では高等女学校に準拠することとなった。ただし絵画、習字、裁縫などの配当時間を多くするなど独自性は保たれていた。

その一方で、跡見女学校卒業生の中で上級学校進学志向が高まりつつあった。当時専門学校に進学するには、四年制の高等女学校(当時四年と五年の二種)卒業者ないしはそれと同等以上の学力を有すると指定された者以外は、受験する前に資格試験に合格しなければならなかったのである。

大正六年(一九一七)三月、跡見女学校は専門学校入学に関して、修業年限四年の高等女学校卒業者と同等以上の学力を有すると認めるよう文部大臣にお願いし、翌七年(一九一八)九月二日認められた。当時の本校主事大東重善は「右の指定は、跡見女学校の成績佳良なるを、認められたるの結果なるべく、実にも同校の名誉であり、又卒業生の幸福と云ふべきである」と言っている(『汲泉』五五号)。なお大正九年(一九二〇)には卒業生一二一名中一二名が日本女子大学校など上級学校に進学している。

また大正十年(一九二二)十二月には高等女学校高等科(修学年限二年)への入学に関しても、高等女学校を卒業した者と同等以上の学力あるものと指定されている。

#### (4) 二代目校長跡見李子

大正八年(一九一九)三月三十一日、校長跡見花蹊は八〇歳の高齢の故を以って校長職を辞し、養嗣子李子に職を譲った。花蹊は名誉校長となり、教壇には相かわらず立ち続けた。花蹊八〇の賀と李子校長就任とを兼ねた祝賀会は二ヵ月後の五月二十五日に催された。



新校長跡見李子は萬里小路通房まへのこうじ

(後に伯爵)の次女として明治元年(二八六八)十月十八日京都に生まれた。そのあとすぐ萬里小路家は東京に移り、幼い李子は花蹊の塾に通うようになった。明治八年(一八七五)跡見学校の創設とともに入学し、その後長く花蹊の指導を

受け続けた。李子の卒業式は明治

二十三年四月のことだったが、実はこれが跡見女学校第一回の卒業式である。李子はこの頃すでに生徒の指導に当たる立場となっていた。その後大正二年(一九一三)跡見女学校が財団法人になった時には李子は理事に列するとともに学校学監に任じられ、名実共に花蹊を補佐する地位についた。大正八年(一九一九)四月七日の入学式当日、新校長李子は次のような訓示を述べた(抄)。

今や世界の大戦は幸ひに終を告げたるも民心は動揺に動揺を加へつつあり

随つてわが国の生活にも幾多の大変化あるべ

きは想像に難からずと雖も我等の将来を照らす光明はと問はば又唯わが師の君の根本精神即ち是と答ふるの外なかるべし。我が校の誇たる此の活ける国宝の価値の滅却するの時節は未来永劫決して之れあることなからん。今日以後不徳不才を顧みずおのれこの重大なる責任に膺るに際し、師弟相率いて共に俱にわが母の心を以て心とせば或は大過なきに庶幾からんか。おのれ今日しも校長就任の初めに当りいささか所感を述ぶ。(『汲泉』五六号)

李子校長は大正十二年(一九二三)五月十日、欧米の女子教育事情視察の途についた。欧州では彼らの文化の違い、教育環境の差などを痛感するとともに、女学校が積極的な役割を果たしていることに意を強くもした。ただ不幸にも同年九月一日関東大震災発生との報に接し急ぎ米国を経て帰国した。

### (5) 白子に土地入手

大正十一年(一九二二)十月三十日、学制頒布五〇年記念祝典に際し、跡見花蹊は教育功労者とし



白子農園での農作業(大根引き)



記念式典における李子校長の式辞

て表彰された。その記念事業ということで在校生  
 父兄が発起人となり、校友会とともに郊外に土地  
 を取得する計画が立てられた。『汲泉』六七号に  
 は「交通便利の郊外地千坪内外を購入して遊園地  
 を設置し花園野菜畑其他行楽趣味に通じたる設備  
 を為し以て花蹊先生表彰記念として校友生徒と共  
 に娯楽せらるゝの用に供するものとす」と  
 あり、事業遂行のための寄附金募集の件が  
 続いて記されている。

その後事業は順調に進められ、埼玉県白  
 子村(現和光市)に約四五〇〇坪の土地を入  
 手し、大正十三年(一九二四)一月十六日登  
 記を行った。この土地は父兄および校友会  
 から記念に花蹊に贈られ、花蹊は直ちに学  
 校に寄附した。

白子のこの土地をどのように利用するか  
 ということについては二転三転があった。  
 当初一〇〇〇坪の予定の際には右に見たよ  
 うに遊園を意図していたようであるが、土  
 地入手後の大正十三年九月頃に東京市へ提  
 出した文書には「当分ハ運動場トシテ使用  
 シ季節ニ依リ養蚕ノ実習用地ニモ使用スル

目的有之」とあり、ここでは主に運動場となつて  
 いる。

その一方でここに校舎を建てる計画も持ち上  
 った。大正十三年十二月四日の理事および監事の  
 集会で、この白子の土地に高等科を設置すること  
 が決議された。高等科の定員は二五〇名、文科、  
 理科および家事科に分け、修業年限を二年ないし  
 三年とするなどかなり具体的なものであった。更  
 に柳町の寄宿舎をここに移し、その跡を運動場に  
 取り拡げ、本校の諸般の設備を漸次改善するとい  
 う大きな計画でもあった。これらに要する費用は  
 約三〇万円、校債募集をもってこれに充てること  
 も決められた。

この事業は、大正十六年(昭和二年)一九二七  
 までに着手するはずであったが、その後大塚への  
 校舎移転などのこともあって結局は実現せず、以  
 後この地は農園として使用され、昭和三十八年(一  
 九六三)に売却されるまで、生徒の園芸実習地と  
 して活用された。

#### (6) 開校五〇年記念式典

学校創立の明治八年から五〇年の星霜を経た大  
 正十四年(一九二五)の四月二十五日、開校五〇年

記念式典がにぎやかに挙行された。その前日は二日間ほど雨続きで心配されたが、跡見の式典はこれまで雨が降ったことがないという当時のいわれ通りに、この日は正に跡見デーともいうべき上天気であった。

式典には閑院宮、東伏見宮の両妃殿下が臨席され、三〇〇名の来賓と五〇〇名の校友、八〇〇名の生徒が居並ぶ式場(雨天体操場と運動場)は立錐の余地もない程であった。

式は跡見李子校長の式辞に始まり、文部大臣岡田良平、東京府知事宇佐美勝夫、東京市長中村是公などの来賓祝辞が相次いで述べられた。引き続き職員総代(大塚久)、生徒総代(土橋百合子)の祝辞が述べられたあと、名誉校長跡見花蹊が謝辞を述べた。

花蹊の謝辞は、

今日はいよいよこそ、お出になりました。私はまだ五十年立ちましたとは思って居りませんでしたが、もう五十年と、聞きましてまことに、驚きました。かうして、ここに、無事にこの記念日を、お祝する事の出来たのは、皆

様方の、おたすけに、よるのでございます。

私はかういふ事は誠に下手でございますから今日はこれで失礼させていただきます。

という大変簡単なものであったということ、この謙虚な謝辞を書き留めた卒業生はその言葉の裏に、五〇年の長きにわたる花蹊の苦心奮闘をくみとり一層感動を深めたということである(『汲泉』七〇号)。

式典の後は卒業生で女優の森律子による「英獅子」などの余興が行われ、また校舎には展示場が設けられて新旧生徒のさまざまな作品が展示された。中でも李子校長や閑院宮妃殿下その他開校当時の生徒作品や、物珍しい写真などが観覧者の眼を引いた。また当日には『跡見女学校五十年史』(大塚久編)が発行され、記念絵葉書とともに参会者に配布された。

#### (7) 花蹊逝く(教育・書画)

大正六年(一九一七)三月、花蹊は創立以来、私財を投じて経営してきた学校を「公器としての跡見女学校」とすべく、その財政基盤を培うために、財団法人化を図り、当時の理事諸君の協力を得て



実現した。「今度こそ此の学校もいよいよ財団法人となつて土台が固まつたのやさかい、こんな嬉しい事はありませんわいな、もう私は此の世に思ひおく事はありません」と花蹊は家人に語つた。

大正八年(一九一九)四月には校長職を、かねての目論見通り、養嗣子李子に譲り、自らは名譽校長として、書道・絵画の授業を引き受け、生命の限り子弟の教育に力を尽くした。

その晩年の感慨を和歌に託して、次のように詠んだ。

またも来て 教への道の花ざくら やまとごころの 春になさばや

大正十五年(一九二六)一月十日、「お師匠さん」としたわれた跡見花蹊は多くの門弟に看取られながら逝去した。時に八七歳、天寿を全うしたというべきであろう。

都下および関西の有力新聞はこぞつて、その訃を伝え、女子教育に捧げた生涯を讃えた。官辺筋よりはその功を賞されて、従五位を贈られた。

花蹊は文京区小石川の光円寺に葬られ、法号を

「浄国院殿芳誉興学花蹊大師」と諡られた。その生涯は寸暇を惜しまぬ自己研鑽と師弟愛に貫かれ、徳をもつて教化するを第一義としたのであつた。その一端を次の文に託して洩らしたことがあつた。

女子教育は次世の国民を造るべき重責あり、榮譽あり、又道徳を守るべき職にあり。故に女子教育は一国の文明富強を養ひ、善良なる国民を養成するには教育の力に依らざるべからず。教育の基礎は家庭にあるものにて、夫の嚴なる父にあらずして、全然慈母の責任に属するものにて、女子教育を熾にして其地位と品格を高め、社会の徳義風俗を善良ならしめ、国の品位を定めるといふ事に力を用いざるべからず。教育ある女子は学校にても、その発達いちじるき事、其母によるもの也。別に六ツかき事にあらず。母たる者学校にさへ怠りなく欠席なき様にさへしたらむにはいか様にも発達はいたさせべく候。

(花蹊『雜記』)

なお、校友会誌『波泉』七二号を「噫御師匠さん」と題して、花蹊の御遺徳を偲ぶ特集号に充てた。また、昭和三年（一九二八）一月、三周忌に当たっては、花蹊の多年にわたる、書・画、和歌・俳句、漢詩をすぐって、『花の雫』を編み、形見の料としたのであった。

### 花蹊と絵画

明治三年（一八七〇）暮れ近く、先行した姉小路公義公主従を追って新都入りをした花蹊は、京都以来昵懇<sup>じこん</sup>だった公家をはじめ、朝廷や外務省などからの相次ぐ揮毫依頼に忙殺された。

明治五年（一八七二）十一月には皇后陛下、翌年二月には皇太后陛下と、御前揮毫を仰せ付かり、一躍東都にこの人ありと喧伝され、折からの新聞や、また当時の開化風錦絵にまで「画教師」と写し出された。明治八年（一八七五）一月、跡見学校を開き、自ら校長となつて世間の注目を浴びながら、教授課目九つの中、習字と絵画を受け持ち、これを生涯賭けて教え続けた。

習字は能書家の父譲りであり、好きな絵画は一歳より、在阪の石垣東山、ついで槇野楚山翁に

就いて励んだ。一七歳の時さらに京都に良師を求め、応挙四世の円山応立、また同門の中島来章に就いて、円山風写生画を深めた。さらに花蹊は南宋派を習い「言はゞ氣韻や風格を表はすもので、写生画とは余程違ふのです。今ではこの二派を折衷して書に於けるが如く矢張り自己流にやつて居ります」という。

南画は野口少蘋の姉弟子に当たり、日根対山について学び、二、三年の修学でその骨を覚えたものの如く、現存する作品も少なくない。

この間、花蹊は漢学・詩文・書を頼山陽の高弟宮原節庵に学び、その私淑は生涯に及んだ。大阪に戻つてからは、同じく山陽の愛弟子後藤松陰に教えを乞うた。花蹊は秘かに、山陽の孫弟子を自任していた。

京都遊学を経て、画業とみに進んだ花蹊は、文久元年（一八六一）、折しも親鸞六〇〇年大遠忌に当たり、近在の寺院の依頼で、襖絵や天井画を描いたという。早い時期の作例としては、一七歳の作『孔雀図』（姉小路家蔵）や、明治三年上京直前の『万山疊翠図』（南画）など見応えのある作品であろう。



花蹊自著挿画 明治十一年八月『形管生輝帖』

明治八年の開業以降では、最も画境に精彩と氣力に富んだものとして、学園収蔵の『四季花卉図』（明治十年、口絵参照）や『秋虫瓜蔬図』（明治十五年）がある。前者は第一回内国勸業博覧会に、後

者は第一回内国絵画共進会

の出品作であろうとは、前

本学教授青木茂の説である。

近年、埼玉県の旧家から、

四枚組襖絵『四季山水図』

を譲られた。元来は軸装で

あったとの事で改装して収

蔵した。明治九年（一八七

六）作の水墨である。この

頃の作に花蹊はしばしば

「天賜玉筆楼」と署した幅

が少なくない。先年の御前

揮毫の折の御下賜品に因ん

だ、画室名であった。

先年、旧帝室博物館の図

書室を博搜して、たまたま

花蹊筆の「都名所絵図」お

よび「花卉図」とも呼ぶべ

き計八点の作品を確認し撮影を許された。明治五年、花蹊三三歳の作で判型が花型や扇面等に裁断された体裁で、公邸の装飾用絵画として揮毫したかとも思われる。作品としては、さすが花蹊だと思わしめる秀作と言えよう。

花蹊はまた、推されて、明治十六年（一八八三）、

米国フィラデルフィアの万国博覧会、明治二十五

年（二八九二）には、米国シカゴ博に、金地一二枚

折腰屏風極彩色『四季草花之図』を出品した。

その他、国内の諸種の展覧会等に出品して受賞

したりしているが、明治の後半期になると受賞の

回数や等級も、やや低調になり、もっぱら宮家や

紳商しんしょう、あるいは地方の名家等に乞われて作画する

例が多く、また、縁故の出稽古に追われる日々で

あった。時に、世間からは学校経営と画家の軽重

を問われ、一方日本画も洋画に好尚を移し、生徒

の絵も四君子などより写生画に人気があるといっ

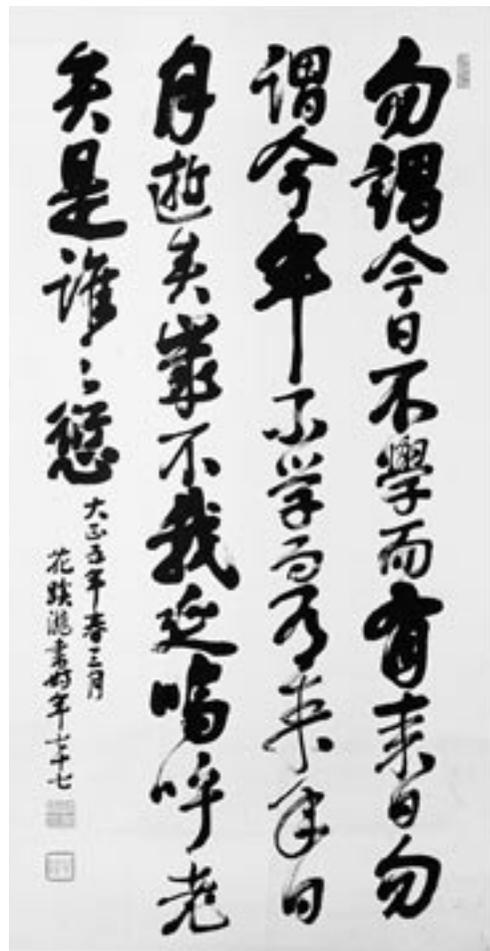
た趨勢で、花蹊の作画も小品的なものに比重を移

している。

現在学園所蔵の花蹊作品およそ数十点にも及

ぶが、今なお時折、作の鑑定などの依頼があつた

りする。



総じて花蹊は仰々しい画論の類は残していないが、折々の生徒への指示や、画賛の類に貴重な見解などが見出せる。

かつて、花蹊の七〇の賀宴に招かれた早稲田の大隈重信侯が祝辞を述べ、その中で花蹊の絵画にふれて、

花蹊女史は……或点から言へば保守主義の、頑固なる氣象の教育家と思はれた時代もあらう。(確かに世にハイカラ主義と異つた教育法であつた)。この精神が当時の女子教育に

反対する風潮を排して着実なる方針となり、他の一面には女子に必要な優美の氣象を、其独特の美術の手腕によりて学生に備へられたと思ふ。絵画の如きは溫柔静淑なる女子の性質を薰陶するに極めて有力であると信ずる。是等の点は花蹊女史の特長にして、又学校の長所と考へる……。(『汲泉』一三三号)

とその、跡見教育の根底に触れ、なお八〇に至り、九〇、一〇〇に至る齢までも、ともに頑張ろうと祝意を結んだ。

### 花蹊と書

梨堂三条実美は新政府の旧公家派の象徴的存在であつた。花蹊の旧主姉小路公知きんちの盟兄として、公知が凶刃に斃たれた後も公私にわたつて姉小路家を扶たすけてきた。跡見学校の講堂に「成蹊館」の名称を掲げ、清国公使館に女弟子を連れて揮毫を披露し、公使何如璋をはじめ文人館員と詩を応酬した内容の『形管生輝帖』の題辞も流麗な彼の筆跡であつた。花蹊の周辺にはこの時代の書家、日下部鳴鶴や巖谷一六あるいは副島種臣らの子女も在

塾したこと等もあり、交流の機会も少なくなかった。書の上での影響関係はほとんど考えられないが、王羲之流を身につけた花蹊は楊守敬派の漢魏六朝派には距離をおいていた。

花蹊はいろいろな書風や筆致を楽しんだ。楷行草、漢詩、和歌、俳句まで、時に頼まれれば神域の神号も、篆・隸こそ殆ど見当たらないが、日記・手帳・消息文から書幅に、また請われての賛・序・跋から代筆まで多種多様な筆跡を残している。

終生二万帖近くの習字手本の、とりわけ長期間書き与えた「開化千字文」は明治十年（一八七七）前後の剛健な書風で、花蹊が他にさきがけて立ち上げた、女学校の校主としての自負と進取の気象とを以って教育に当たった、その反映であった。幼い門弟子女をして政府の賓客や高官の前で椽大の筆を揮らせたのもそこにあつた。「聖上東宮・皇后女御、龍顔綸旨」と始まり「衆庶歡樂・昭代泰平、千秋無疆」と四字句を二五回続けて千字文にした。皇室や女官への手本としても差し上げている。

「女が女らしい字を習えば愈々益々女々しくなる許りで、風韻も気品もあつたものではありませ

ん」と教えている。

花蹊の書道はいわゆる「跡見流」として、跡見出身者の手形にもなつた。

## 2 大塚への移転

### (1) 校舎移転への動き

柳町校舎の再拡張ないしは移転が学校関係者の間で問題とされるようになったのは、大正十年（一九二一）前後のことであつた。理事会でこの件がはじめて正式にとりあげられたのは、大正十一年（一九二二）四月十八日のことであつたと考えられる。『汲泉』六五号には「(同日)本校拡張案につき理事会を開き原富太郎、増田義一、安田善三郎、大東重善、及跡見花蹊、跡見李子の諸氏出席種々協議されたり」と記されている。

飛んで大正十三年（一九二四）十二月には学校拡張、校債募集の件で理事会が開かれており、次いで同月八日に評議員会が開かれた。この間校舎増築にかかわるものとして前述したように同年一月に埼玉県白子村に土地約四五〇〇坪の取得も行われていたが、結局ここには校舎は建てられなかつた。当時校舎の拡張ないしは移転を必要とする理

由について、主事を務めていた大東重善は次のように語っている。

当校現在の校舎は、校地の狭隘なるに似ず、教室階段の配置等、都合善く出来てはをりますけれ共、十数年前の建築にて、今日の如く生徒が増加し来るに於ては、教授上管理上の不便実に少からず、第一運動場の狭隘、理科、音楽、の如き特別教室の狭小、其の他病室の設備なき為生徒に発病者ありても、欠陥あるを免れざるの憾みあるばかりでなく、近年学問教育の進歩に遅れ、現在の学科程度に甘んずることは、時勢が許さざるのでありますから、高等科専修科等の設置を必要とするも現在の校舎にてはどうすることも出来ません。此の点より考へましても、拡張の方法を講ずるの必要は、目前に迫つて居るのであります。

（『汲泉』七一号）

つまり、校地の狭隘、生徒数の増加および高等科専修科などの設置の必要から、学園はなんらかの処置をとることを迫られていたのであった。ち

なみに生徒数は、明治四十四年（一九二二）四二八名、大正五年（一九一六）には六七五名、大正十年（一九二二）には六八九名、昭和二年（一九二七）には七九八名と急増した。なおここでは校舎の拡張について論じているため触れられてはいないが、学校が低地にあつたため、しばしば洪水の害をこうむつたことが校地を別に求めることの大きな要因の一つとなつていた。たとえば大正十四年（一九二五）十月一日は前夜からの豪雨で休校となつたが、『汲泉』七一号の「校内だより」の筆者（葛原函か）は「往來も運動場も濁り江になりてやむなく本日休校」という戯れの歌を書き記している。跡見花蹊は大正十五年（一九二六）一月十日逝去したが、いまわの床にあつても、校舎の問題に心を勞し、眠りより醒めて突如として「ア、高輪の毛利さんの屋敷が学校の手に入つたさうだね、大変嬉しく思ふ」と跡見李子に告げたという話が残っている。

花蹊逝去直後の同月二十三日に開かれた理事会で、学校拡張・専門部設置など将来の進展を期するため、校債を募集することに話がまとまつた。校債は五分利付金三〇万円を募集することになつ



昭和七年春の校庭。新旧両様の校服がみられる

たが、その後四月十日までに応募した人員と金額は、早くも九八二人、二二万一〇〇〇円に達していた。このほか校友会では寄付金を募集し、またやや遅れて生徒の父兄の有志者が後援会を設けて拠金の方法を講じた。

さかのぼって大正十四年の時点では、拡張(寄宿舍のみ他地に移すことを含めて)か、それとも

全くの移転かということについては結論は出ておらず、翌十五年七月二十八日の臨時理事評議員連合会では、従来の校地に鉄筋コンクリート三階建校舎を建築しうるかどうかを研究するため専門家をわずらわせることに決まった。その結果どういう結論に達したかを示す資料はないが、おそらくはその建築は不可能ということになったもので、学校としては他に適当な校地を求める方向へと向かい、昭和五年(一九三〇)三月十八日の理事会で大塚陸軍兵器支廠跡四四五・一五坪を大蔵省から購入することに決定した(それまでの柳町校舎の敷地は初め一九九二坪、後一部売却して一六七五坪と

なっていた)。これが現在の大塚校地となる。

大東主事は大塚校地について「此の場所は高燥にして、電車の交通も便利に学校の敷地としては申分なき好適な場所」と称している。なお当時大東は、女学校に小学校を付設し、且つ女学校卒業生のためには高等科ないし専門科を設けて、首尾一貫した完全な女子教育機関を設ける予定であるとも述べている。

大塚校地の受け渡しは昭和五年(一九三〇)六月十二日に完了、その少し前の四月二十一日に委嘱された新校舎建築委員(増田義一、跡見泰、賀茂厳雄、斉藤菊寿、大東重善、原富太郎、星野錫、宮原六之助)を中心に校舎の建築が進められた。

## (2) 洋装校服の制定

昭和五年二月に跡見女学校の洋服の校服が制定されて、同年四月から着用されることになった。この制服の制定に当たっては、当時の教員たちが何度も検討し、デザインは三越が担当した。従来の和服の校服に対して洋服の校服が制定されたのは、時の流れによることに加えて大塚に校舎が移ることになりその通学と、広くなる運動場での体育の便宜を配慮した面もあったということである。



新しい校服は、ジャンパースカートとジャケット（上衣）という形で、当時他校でも同じようなものが見られたが、跡見女学校の校服には次のような特徴があった。他校では夏季と冬季の校服を機械的に区別しているのに対して、跡見では、気候によって任意ジャケットの着用に通性があるのは、花蹊の合理的な考えが生かされている。また、和服の校服の袴、殊にお塾袴の形が、スカートのひだ数の少ないところに生かされている。ひだ数は全部で九枚である。またジャケットの衿は和服の羽織衿の形を残したものである。ブラウスの衿ジャンパースカートの衿ぐりの尖った角度は、気持ちを引き締めて学業にいそしむようにとの配慮がなされている。またブラウスの衿は取りはずしができるようになっており、衿だけを洗濯し、糊づけをしてアイロンをかけ、いつもぴんと張りのある清潔なものにしていくという配慮がなされている。校服は、いろいろな面で自分を磨き上げるために着用するものであるという李子校長の考え方にもとづく。

なお洋服の校服制定にあわせて髪型は横分け、お下げ、三つ編みとし、靴下は黒木綿の長靴下、

靴は黒皮短靴とそれぞれ定められた。ただ洋服の校服用は任意で、昭和十七年（一九四二）頃まで和服を着用している姿が見られたという。しかしその十七年は、全国の女学生に国民服着用が強制されるという時代であった。

洋服の校服が制定された同じ頃、校章が制定された。図案は図画担当の小林鍾吉が李子校長から委嘱されて制作に当たり、ほぼ現在の校章と同じものである。桜の花びらに丸みがあるのは、円満な人柄になるようにとの李子校長の教えが込められている。

しかし昭和十一年（一九三六）から校章の上に日の丸の副章を全員が付けるように定められ、終戦まで続いた。また校章は初め七宝焼だったが、戦時中は金属製のものに限られるようになり、布製に代えられた（板谷春子稿「洋服校服の制定の由来」などに依拠する）。

### (3) 校旗

跡見女学校の校旗は、昭和三年（一九二八）、昭和天皇御大典を記念して初めて作られた（写真）。

その年の十二月十五日中学校、女学校以上の学生などを天皇が御親閲なさった時、新定の跡見の校



旗が二重橋前広場にひるがえったのである。

その後昭和十三年頃に新しく作り直され、教員板谷春子の手による修理などを経て現存の中学校高等学校の校旗となっている。なお短期大学、大学でもそれぞれの校旗が作られている。

#### (4) 桜観世音菩薩像の造立

昭和八年(一九三三)一月十日、跡見学園の守り本尊とも仰がれる桜観世音菩薩像の開眼供養式が執り行われた。同尊像の造立は当時の校長跡見李子の発願になり、その胎中に先師跡見花蹊の遺骨を納め、学校の鎮護を祈り、併せて学園ゆかりの人々の女徳涵養に資することを願ったのであった。

その意を受けた卒業生の会の松花会は、安田暉子(安田善次郎娘、同善三郎夫人)を中心に浄資を割き、帝国美術会の山崎朝雲に観世音菩薩像の制作を委嘱した。朝雲は

推古朝の手法により、

一刀三札の精進にて工

がなつたと称せられる。

この木彫りの像の胎内

には李子の願い通り花

蹊の遺骨が納められ、

浄土宗大本山増上寺澄誉大僧正に選号を請い、桜観世音菩薩と選名された。

開眼供養式の日取りは花蹊の祥月命日にあたる一月十日が選ばれ、新築落成を告げたばかりの白亜の薫り真新しい大塚新校舎の一室で執り行われた。会場には発起者である松花会会員(安田暉子は病のため欠席)を始めその他の各会の会員が居並ぶ中で、式は厳粛に進められた。その後尊像は

一時期校長宅内の花蹊記念書斎に安置されていたが、昭和八年九月より昭和十八年(一九四三)まで校舎三階の中講堂に安置されていた。戦後に中学校の校長室に移され、現在に至っている(一時期法人理事長室)。

先述の通り、跡見学園の守り本尊とされる桜観世音菩薩像をめぐる、さまざまな奇瑞が語られているが、次は学園の書道教師として、またお塾(寄宿舎)の舎監として長きにわたって学園に貢献した井上幸子が語ったという、昭和二十年(一九四五)五月二十五日の空襲の際の経験談である。

校舎が焼け始めた時、私はまず桜観世音様をお守りしなければならぬと思いました。



それで桜講堂へ飛び込み、観世音様をしつかり抱いてお塾の方へと走りましたが、途中力尽きて土の上に観世音様と一緒に倒れてしまいました。ふつと気が付いたとき、今までも塾の方向に吹いていた風が逆に吹いていたのです。あゝこれで助かった、と思つたのも束の間、今度は鹿島邸方向から吹いて来るではありませんか。いよいよ鹿島邸に火の手が上がった時はもうこれでお塾ともお別れか……と思いましたが。あとは唯、桜観世音様を抱きしめて祈り続けました。そうしたらどうでしょう。間際で又風がお塾の反対方向に吹き始めたのです。こんな事つてありますか？ 奇跡としか言えないでしょう。

（『跡見のお塾』）

また跡見女学校の卒業生で、当時同校の新進教員だった板谷春子は、同じく戦時中の体験を次のように語っている。

昭和十九年、戦時中、学校の白子農園へ警備当番教員の夕食材料を取りに行った私が、

成増附近の帰路で空襲となり、機銃掃射に逢い銃を向けているアメリカ兵の青い目と合つてしまい、もう撃たれると思ひ畦道に、ひれ伏した瞬間、桜観世音菩薩様の御姿が見えて、飛行機は、上昇して去って行きました。

なお板谷春子は、生徒の時から桜観世音の御守を肌身離さず持つていたということである。

##### (5) 花蹊・李子胸像の制作

昭和十一年（一九三六）一月十一日、跡見女学校の初代校長跡見花蹊の胸像除幕式が行われた。

そのいきさつは次の通りである。

大正十二年（一九二三）頃から、跡見女学校の卒業生岩本（旧姓本山）志可子（金鈴会）の父で彫刻家の本小白雲は花蹊胸像の制作に心血を注いでいたが、大正十五年（一九二六）に花蹊が逝去したため落胆のあまり未完成のままアトリエの奥深くに蔵されたままとなった。その後年が過ぎて昭和十年（一九三五）になった頃、志可子が父に向かって胸像は何時完成するのかと問うたことが激励の言葉となり、白雲は翻然奮起して再び制作に打ち込み、ついに完成を見たのであった。



大塚新校舎の正門

胸像は昭和十一年一月九日、すなわち花蹊の忌日の前日に学校にもたらされ、翌々十一日、始業式終了後除幕式が行われたのであった。式には職員生徒一同参列し、理事、監事も列席した。当初は塑像であったが、その後銅像に作られ、同年四月九日に完成した。

次いで昭和十五年(一九四〇)十一月十五日に校友会贈呈になる李子胸像の除幕式が行われた。花蹊像と同じく本山白雲の制作である。この像は実は数年前に完成していたが、日中戦争勃発という非常時に鑑みて校友会は贈呈を差し控えていたのであった。式当日には理事、評議員、旧職員、校友各会の監事などが列席、全教員生徒が参列し、除幕は李子後嗣となつた跡見純弘の手によって行われた。

なお、これらの胸像は、戦時中いづれも供出の運命となつた。

#### (6) 大塚新校舎

大塚新校舎建築の地鎮祭は、昭和六年(一九三一)十月二十八日に行われた。そ

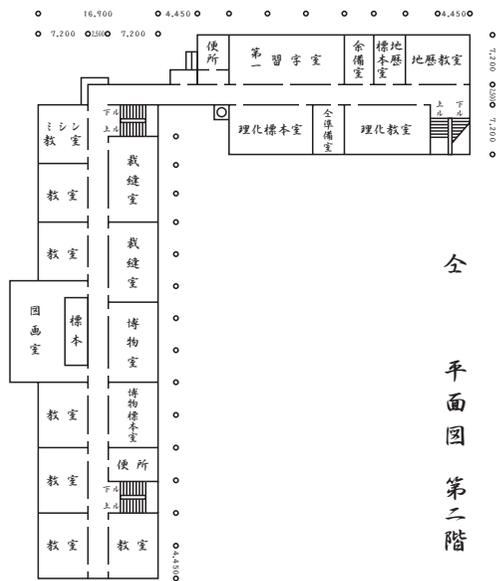
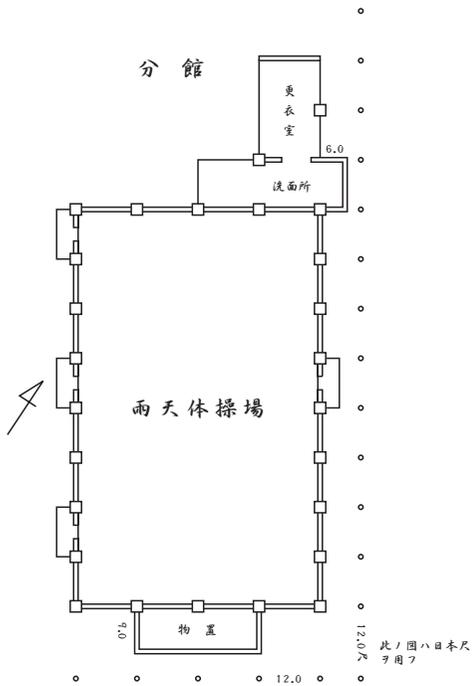
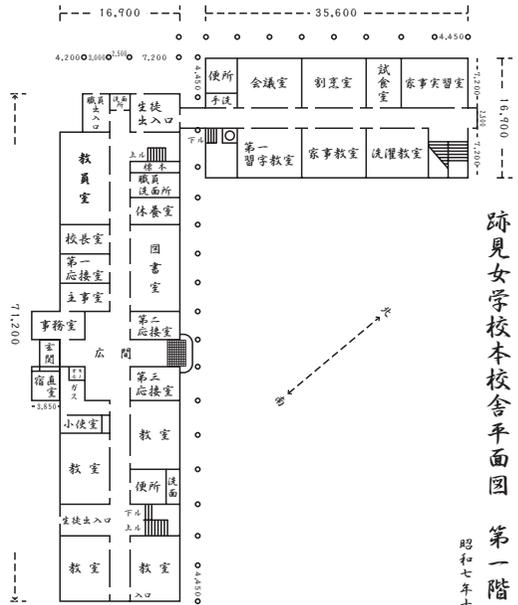
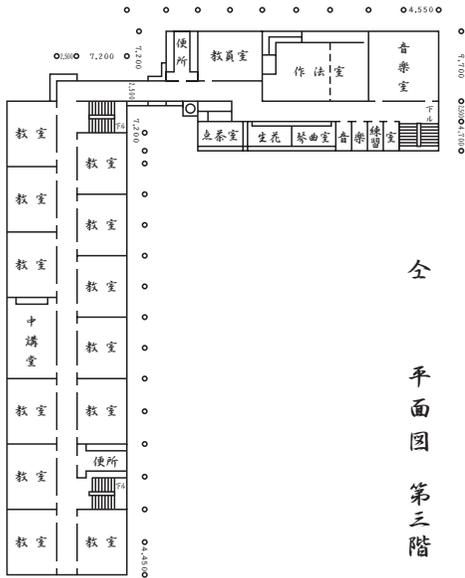
の後工事は着々と進み、同七年八月末日には外部の足場を取り払うに至つた。その後内部の構造、配置、水道、ガス、暖房設備その他の工事が行われ、同年末にはほぼ落成の運びとなつた。そして十二月十九日から二十三日にかけて柳町校舎から大塚新校舎への移転が行われた。同二十七日には寄宿舎も移転した。明るる昭和八年(一九三三)一月十一日には、大塚新校舎で晴れやかに始業式が執り行われた。

新校舎の落成式は同年四月二十三日に挙行された。式典には閑院宮妃直子殿下が臨席され、文部大臣鳩山一郎(代読)、東京府知事香坂昌康、公爵三条公輝(代読)、文学博士佐佐木信綱その他から祝辞が寄せられた。

式典の中で発表された工事報告によると、新校舎の概要は次の通りである(『汲泉』九三号)。

校地(四四五〇坪)は昭和五年(一九三〇)三月に払い下げを受け、その買取価格は四九万六三三二〇銭であった。建築工事は鹿島組の請負で昭和七年(一九三二)一月に着手し、同八年三月に竣成した。

建築総面積は二一四二坪七合五勺、うち鉄筋コ







落成式当日は天気晴朗、今を盛りと花々の咲き誇るなかで、式場(屋内体操場)には来賓五〇〇余名、校友同じく五〇〇余名が列席し、在校生徒(四、五年生のみ)一八〇名が参列して、満場立錐の余地なき有様であったという。ここに跡見女学校の新しい歴史の始まりが告げられたのであった。

#### (7) 新しい寄宿舎

新校舎とともに、寄宿舎(お塾も新たに建てられた。新しい寄宿舎は木造二階建て、延べ坪数は二二八坪二合五勺、その内訳は一階が一、二六坪五合、二階は一〇一坪七合五勺であった。

寄宿舎の位置は、本校舎玄関の広場を隔てて正面やや左手にあり、さらにその左には校長住宅があった。当時のある塾生が記した回想記の一部を次に抄出してみよう。

一、大塚町五六番地の新校舎が落成しまして移転したのが、私の二年生の時でした。広々とした敷地、モダンな校舎、うれしかった事

を忘れません。お塾は隅の方に二階建ての明るい寄宿舎で、学校には靴をはいて出かけました。

一、昼食はお塾に帰らずに、手作りのお弁当が小使室に届き、お教室で皆で一緒に楽しくいただきました。

一、お部屋は一号室から六号室まであります。室母、お姉さんが上級生で、私も四年生まで子供でした。隣のお部屋に用事で参ります時には、「ごめん遊ばせ」ときちんと両膝をついての御挨拶をして、「どうぞ」というお声があつて障子を開けるようにと、室母さんから教えていただきました。(『跡見のお塾』)

寄宿舎の部屋の様子などについて、別の塾生が

塾生の部屋はすべて二階、一号から六号室まであり(一、六号は十七畳半、二、三、四、五号は十五畳の畳敷き)、部屋の真中に四角い大きな机を四ツ並べ、奥から上級生から順に向かい合つて勉強しました。一室に五年一年まで概ね六人〜七人位で、五年生をお母



初めて慰問袋を作った生徒たち

さん(室長)と呼び、五年生が二人居れば一人をお姉さんと呼び、後は皆名前呼び合いました。日頃お母さんと呼んでいるので、つい外出先でも呼んでしまい、周囲の人を驚かした事もありました。

(同)

と記している。

### (8) 六〇周年記念式典

大塚新校舎に移転した翌年の昭和九年(一九三四)五月十二日に跡見女学校創立六〇周年記念式典が執り行われた。式当日は数日來のぐずついた空も朗らかに晴れ、校門前の緑に春光が映える中、式場の屋外運動場には来賓、校友会員、在学生等一三〇〇余名が着席した。

午前十時一同敬礼により式は始まり、李子校長の教育勅語の奉読、式辞のあと、次に記す数多くの祝辞が寄せられた。

文部大臣齊藤実(代読)、東京府知事香坂昌康、東京市長牛塚虎太郎、全国

私立中等学校連合会長荒川五郎、文学博士三宅雄次郎、東京女子医学専門学校校長吉岡弥生(本校に一時在学)、学校側からは職員総代の大塚久、卒業生総代志賀鉄千代、在学生総代樫村治子がそれぞれ祝辞を述べた。

午後からは校友会主催のバザーが校舎の二階で催され、十四日まで三日間開かれた。入場者は引きもきらぬ盛会であったとのことであり、宮内省からも役人が派遣されて数点の買い上げがあったということである。バザーの純収益六八八三円一五銭は学校に寄附された。

## 3 戦時下の跡見女学校

### (1) 愛国子女団の結成と勤労奉仕

昭和十二年(一九三七)七月七日、中国・盧溝橋において日中両軍が衝突したのをきっかけに、日中戦争が勃発した。跡見女学校においても戦時色は日を追って色濃くなっていった。

同年九月には、陸軍当局より約二五〇〇個の慰問袋の作成を依頼され、教員始め生徒一同一人二個ずつ、九月二十日までに製作持参することになった。当日は、ただでさえ重い鞆に加えて、慰問

袋二個ではち切れそうな風呂敷包を右手に左手にと持ち替えて、生徒たちは登校におおわらわであった。学校の玄関に山と積まれた慰問袋を見て、生徒たちはこの慰問袋が一日も早く戦線の兵士の手が届き、慰めの一助となることを念じたのであった。

なおこのときが慰問袋製作の最初と考えられるが、翌昭和十三年（一九三八）三月八日には一六一個の慰問袋を愛国婦人会に寄託するなど、生徒達は相次いで慰問袋の製作に従事した。

十二年十一月三日には、愛国婦人会の趣旨に則つて、跡見女学校愛国子女団が結成された。同年十月十五日に李子校長が、永年教育事業に貢献した功績を以て、藍綬褒章を授与されたその記念の発会ということである。

同子女団の団員は跡見女学校の全生徒であるが、発団式当日の訓示において李子校長は「今日ノ時局ニ鑑ミマシテ、日本女性ガ愛国婦人会ノ趣旨に則リ、銃後ニ於ケル婦人報國ノ精神ヲ鍛鍊致シマシテ、他日此学園ヲ巢立チマシテ国民ノ母トナリ、愛国婦人会員トナルノ日、克ク其任務ヲ全クスルノ素質ヲ培養スルニアルコトハ明カデアリマス

（中略）非常時日本ノタメニ、犠牲奉仕ノ誠ヲ致スベキノ秋デアリマス」と訓まをしている（『波泉』一〇六号）。

この頃から観兵式拝観、靖国神社参拝、勤勞奉仕などが次々と行われるようになった。

勤勞奉仕に関しては、昭和十三年夏休みの七月二十日から二十四日までの五日間にわたり全校あげての勤勞奉仕となった。二、三年生は学校の屋内屋外の清掃作業、一年生は白子農園で草取り清掃、四、五年生は陸軍省依託の白衣衿章の縫製を行った。

同年の九月二十五日には明治神宮において清掃奉仕を行った。当日跡見女学校の四年生など約五〇名は国防服の作業服の上から「跡見女学校愛国子女団」のたすきをかけて、手に手にほうき、熊手、芥籠を持って定められた作業所に向い、約一時間神域を掃き清めた。翌昭和十四年（一九三九）二月五日にも五年生五〇名が明治神宮で清掃奉仕を行った。

昭和十五年（一九四〇）になると勤勞奉仕は一段とエスカレートするに至り、五月二日には五年生が半数ずつ翌三日にかけて板橋区志村の陸軍兵器

支廠で勤労に従事し、五月十八日には三年生の全員が明治神宮で清掃奉仕、六月二十二日から二十三日にかけて全校生徒が宮城(皇居)外苑で奉仕作業に従事した。

昭和十六年(一九四一)には、夏休みの十数日間、白子農園や校庭などで勤労作業のため登校、二期以後も作業を続け、十二月の十七、十八の両日には五年生が陸軍兵器工廠に出動して勤労作業に従事した。

なお跡見女学校の防空演習は、昭和十四年の夏休みから本格的に行われるようになったが、その前年の十三年(一九三八)九月二十三日には、第五時に防空避難訓練が行われた。

## (2) 報国団結成

昭和十六年の四月以降に跡見女学校報国団が結成された。本団は本校全教員及び全生徒を以て組織し、東京府学校報国団に所属した。各学校とも従来の校友会(学友会など在校生の組織)関係の事業は報国団によって行われることになったのである(跡見女学校の校友会は卒業生の組織であるので別)。

跡見女学校報国団の組織は、総務部、鍛錬部、

国防訓練部、学芸部、生活部の五部に分かれ、中でも国防訓練部(防空訓練其の他国防上必要な訓練に関する事項を扱う)や生活部(保健・衛生・校外保導・学用品配給等に関する事項を扱う)などはそれまでない部であるという。

従来の活動のうち例えば生徒図書班は、それまでは学芸発表などさまざまな活動を行ってきた跡見女学校済美会の一組織であったが、報国団が組織されたことよって、報国団学芸部図書班として引き継がれることになった。このほか従来から盛んに行われていた勤労奉仕や、次の項で述べるさまざまな錬成会も報国団の下で行われることになった。

### 報国団各部の班編成

#### 一、総務部 企画班、庶務班、会計班 二、鍛錬部

体育錬成部 (体操分班、籠球分班、排球分班、庭球分班)

校外体錬班 (旅行見学分班、遠足強歩分班、合宿訓練分班、スキー分班、水泳分班)



集団勤労班（勤労奉仕分班、  
農園作業分班）

三、国防訓練班（防空訓練班、防  
災訓練班、防諜訓練班）

四、学芸部 図書班、雑誌班、映  
画班、講演班、音楽班、趣味班  
（歌、書画、琴、茶、花等）

五、生活部 保健衛生部、校外保  
導班、職業紹介班

### (3) 錬成会

前項に記されているように、昭和十六  
年（一九四二）四月以降に跡見女学校報  
国団が結成されて、その中に鍛錬部が設け  
られ、以後さまざまな行事が同部を通じ  
て行われた。

同年七月十八日には全校上げて白子農  
園に強歩、曇りがちな空から時折陽がも  
れる程度であり暑くはなく、歩くのに  
ちょうどよい日和であったという。行程  
一一キロを全員元気に歩き、この時は帰  
りは電車で戻った。

この年は九月二十二日にも白子農園へ

の強歩が行われた。「学校便り」にはこの強歩に  
ついて次のように記されている。

九月廿二日（月）全校生徒、白子農園往復適  
応強歩をいたしました。全行程を四段にわけ、  
白子迄ゆくもの、上板橋迄・大山迄・池袋ま  
でもどるものとし、各人体力に適したところ  
をえらびました。全行程五里半。

沿道には陸稲がみのり、そばの花が白く咲  
きさかっておりました。

今日は毎月廿二日、青少年学徒二賜ハリタ  
ル勅語御下賜の日を以って、この様な強歩を  
することになりました。（『汲泉』一一八号）

白子農園への強歩、および同園での勤労作業（鍛  
錬作業と言うようになる）はその後戦時下も続け  
られた。強歩の間中、口をきくことも禁じられる  
という厳しさであった。

昭和十七年（一九四二）には、夏季錬成と銘打っ  
て林間学校、水泳合宿などが行われた。池ノ平楽  
山荘での林間学校はすでに昭和十四年（一九三九）  
から行われていたが、この時は七月二十六日から

八月一日まで例年通り行われた。参加者は一年生から五年生まで約七〇名だった。

主な行事は野尻湖(往復約四里)、苗名の滝(同約三里)、赤倉(同約二里)などへの強歩のほか、山荘の裏にある畑の雑草取り作業が組まれていた。所々に刺のあるあざみが大きく根を張ってびくともしないなどということもあつたが、日頃白子の農作業に慣れている彼女等にはさほどの苦勞でもなかつたらしく、生徒の一人は「此れ(白子農園の作業)と比較すると、山荘の作業は何分の一にも及ばないと思つたのは、澄み切つた空気の為であらう」と感想を述べている。池ノ平での夏季鍛錬は昭和十八年(一九四三)まで続けられた。

水泳合宿は昭和十七年の七月三十一日から八月六日まで房総半島先端の西岬海岸富士屋旅館で行われた。参加者はやはり一年生から五年生までの八〇名ほどであつた。水泳の指導には教員のほか現地の人々も加わり、午前中三回、午後三回海に入つて、皆相当上達したという。

このほか池ノ平でスキー練習が、昭和十四年度には始められており、翌十五年(一九四〇)には卒業生であるスキー家黒田米子の指導の下に、十二

月末から行われているが、その後冬季鍛錬として昭和十八年二月まで続けられたという記録がある。

昭和十七年十月三十日には、本校初めての運動会が体育鍛錬大会と銘打たれて、本校運動場で開催された。当日は学制頒布記念式がまず執り行われ、今回の体鍛大会は「ホンの内輪」ということで小規模な形で行われたものだったという。来観者は生徒父兄、校友会諸姉など約一五〇名ほどであつた。当日のプログラムは次の通りである。

#### プログラム

昭和十七年十月三十日(金)  
学制頒布七十年記念

#### 開会式(九時三十分)

- 一、 整列
- 一、 校旗入場
- 一、 国旗掲揚(国歌斉唱)
- 一、 宮城遙拝
- 一、 皇軍将士ニ感謝祈願黙禱
- 一、 開会ノ辞
- 一、 愛国行進曲

一、演技

1	合同体操	全体	21	ポルカセリーズ	二年
2	六十米	二年	22	継走	五年
3	綱引	三年	23	綱引決勝	三年
4	継走	四年	24	女子中等学校体操	四年
5	春風	一年	25	避球	一年
6	六十米	五年	26	マズルカ	三年
7	運搬競争	三年	27	継走決勝	全学年
8	三人四脚	二年	28	カドリール	五年
9	六十米	四年	29	合同体操	全体
10	置換競争	五年		【番外】スプーンレース	職員
11	綱引	三年		樽転し	職員
12	六十米	一年		スプーンレース	来賓・校友
13	胡蝶	二年		閉会式(三時)	
14	女子青年体操	五年		一、校歌	
15	継走	三年		一、閉会ノ辞	
16	御代の輝 (昼食休憩)	四年		一、万歳三唱	
17	継走	二年		一、国旗降納(国歌斉唱)	
18	六十米	三年		一、校旗退場	
19	縄跳競争	四年		一、解散	
20	継走	一年			

『汲泉』二二二号には「第二回からは、校友各位にも御通知して大々的に挙行せられることと存

じます」と書いてあるが、不幸にして戦局は緊迫の度を加え、戦争中には第二回大会は開かれなかつたようである。

#### (4) 学徒動員

昭和十年代に入つていわゆる国防国家体制が進められていく情勢の中で、学徒の集団動員作業が次第に恒久化されていった。昭和十六年（一九四一）二月には一年を通じて三〇日以内は授業を廃して作業に当てることができ、作業を行った日数・時数はそのまま授業をしたものと認められることになった。

学徒の動員体制は、太平洋戦争の戦局が進むにつれて急速に進められ、昭和十八年（一九四三）八月には学徒戦時体制確立要綱が閣議決定されて、学徒の戦時動員体制が確立された。昭和十九年（一九四四）一月には動員期間は一年の三分の一が標準となった。

跡見女学校では四年生が昭和十八年九月十一日から二十一日まで本所専売局、理化学研究所、共同印刷株式会社などに動員された。また同年十月十三日には跡見女学校校友会女子勤労挺身隊が結成された。

昭和十九年二月、政府は決戦非常措置要綱を決定したが、これによつて中等学校程度以上の学徒は、必要に応じて常時動員に應じる体制を整えていることになり、学徒動員は一層強化された。この頃の跡見女学校の様子について板谷春子稿「私の経験した戦時下の跡見学園」には次のように記されている。

十九年五月に入ると三年生以上は学徒動員となり、軍需関係の職場で働かねばならなくなつた。一年生も授業の傍、海軍の水平帽子や傷病兵の白衣縫製等の勤労奉仕、戦地に送る慰問袋作り、千人針等で落着いた授業が次第に困難となつた。

七月に入り戦局も深刻さを増し四年生・五年生は全員学徒動員となつた。四年生の三分の一が教室で、五年生は雨天体操場で夫々陸軍の軍需工場と化した学校工場で重労働な作業に一日中従事したのである。三年生は学校外の生産工場へ、四年生の三分の二も学外の軍需関係の職場で女生徒には酷し過ぎる作業に従事せざるを得ない状態となつた。私

も四年生の学校工場や校外の職場へ、担任の先生方の応援に廻って歩いていたが、当時の生徒達は服装から言動に至る迄実に、きちんとした女学生の姿であった事が忘れられない。

昭和十九年（一九四四）二月以降の動員の例を『跡見学園年表』から拾うと次の通りである。

二月二十一日、二、四年生一五〇名が三月三

十日まで小石川凸版印刷株式会社に出動

七月十七日、四年生一〇〇名が九月三十日ま

で東京宝塚劇場地下の中外火工作業所にて

風船爆弾作製に従事

八月十四日から三年生一六〇名、ライオン歯

磨工場、同一〇〇名が山洋電気工場に出動

八月二十九日、動員中の学徒は三月三十一日

まで引続き出動することを文部省が指示

十一月十六日から二年生一〇〇名ずつ三越軍

服縫製工場・陸軍功績調査部・貯金局に出

動を割り当てられる。

このほか学校工場での勤労従事があるが、これ

については別項で述べる。

昭和二十年（一九四五）に入り戦局はいよいよ苛烈さを加えるに及び、三月、政府は決戦教育措置要綱を決定、国民学校初等部を除き、学校における授業は「原則トシテ停止」することとした。跡見高等女学校（十九年四月に高等女学校となる）においても、授業の行われることはほとんどなくなった。『跡見のお塾』を見ていくと、真弓会（昭和十六年四月入学、同二十年四月卒業）は四年生の二学期頃からほとんど勉強をしなくなり、週に一日だけ学校に行つたという回想が見える。

##### (5) 高等女学校となる

昭和十九年（一九四四）四月から、それまでの「跡見女学校」は「跡見高等女学校」となった。『跡見学園年表』の昭和十八年（一九四三）十一月三日の項（文部省の設立認可は十一月五日）を見ると、「跡見高等女学校（戦時短縮四年制）設立の件文部省認可。花蹊創立以来一貫の伝統ある教育課程は画一的な戦時教育のためここに余儀なく廃止」とある。

右の「画一的な戦時教育」については、中学校、高等女学校、実業学校を一つの中等学校制度に統



理研王子鋼材跡見工場での作業。生徒たちは機関砲の弾倉の製作に従事している。

一したことがまず上げられる。中学校、高等女学校の学科課程において、それまでの教科に加えて

修練が定められた。修練とは教科外の行事および作業等を組織化して必修としたものであった。中等学校の教科書も昭和十八年から国定となった。

また「戦時短縮四年制」とあるが、

これは従来高等女学校の修学年限は五年制を基本としていたが、昭和十八年四月に中学校とともに四年制となった。在学年限を短縮したのは、早く学窓を離れて生産に従事させる要請からであった。

跡見高等女学校ではこれにより、昭和二十年（一九四五）三月の卒業式では五年生（御楯会）と四年生（真弓会）の同時卒業となった。

ここに跡見としてはそれまでの個性ある教育課程から離れたのであるが、現実には、すでに生徒たちは学校外の工場へ学徒動員に駆り出され、あるいは学校工場も高等女学校発足直後に設

立されるという状況にあり、正規の教育課程の履修などは思いもよらないというのが実情であった。

#### (6) 学校工場

戦時下の生産増強の要請のもと、工場への学徒動員に加えて学校工場が設けられるようになった。これらの方策は昭和十八年度から十九年度にかけて強化の一途を辿っていった。

跡見でも昭和十九年に入って次々と学校工場が設けられた。もつとも早いものとして同年五月二十五日に理研王子鋼材跡見学校工場が開場した。作業場は雨天体操場を使用して五年生（御楯会）が、おもに一三ミリ機関砲の弾倉の製造作業に当った。ハンマーを持ち正に男子の仕事であり、大きな機械を扱ったり、リベット（鉄筋工事などで使う大型のびょう）打ちをしたり、熔接をするなどほとんど立ち放しの激しい作業であった。

作り方が悪くて弾がつかえて出なかつたりしたら、こちらがやられてしまうとわれ、生徒達はほんとうに正確に作らねばならないと皆緊張して頑張った。作業の指導の立場にあった当時の教員伊藤嘉夫は「感心したことはこの作業は鉄材を扱う過激な仕事で、これは重機関銃の弾を入れる筒

被災した校舎。外壁を残して内部はおおむね焼失。



です。工場長の言葉では徴用工の成績よりも跡見の誠実なお嬢さんの手に作られたものの方がよくて検査に八割は通過するとのことでした。男子でも並大抵ではないのに純情な苦労を気にしない者の強さを感じました」と回想している（『汲泉』復刊一六号）。

その後が続いて同年七月十三日に栄進社の開場式、十二月四日に山洋電気の入所式が行われ、年明けて昭和二十年（一九四五）五月一日にはライオン歯磨学校工場が開所し、別館一階、図工室などで作

### (7) 空襲と被災

昭和十九年に入ると戦局は一層急迫を告げ、同年七月サイパン島が占領された頃から本土空襲が本格的となり、二十年に入る頃からは首都東京が激しい空襲にさらされるようになった。

跡見でも空襲警報が発令されると、生徒達は一斉に防空頭巾と鉄胃（ヘルメット）をかぶって運動

場の防空壕に待避する。間もなく接近してきたB29から爆弾や焼夷弾が投下される。折るような気持で壕の中で息をひそめ、やがて飛行機が飛び去ると、互いに命が助かったことを喜び合うという日々が続いた。

空襲はいよいよ激しく、一〇万人近くの市民が命を失った三月九日から十日にかけての夜半の東京大空襲の時は跡見の校舎には被害はなかったが、下町中心に東京市街の被害は甚しく、本校生徒二名が犠牲となった。

四月十四日早朝にはB29約一七〇機が来襲、宮城、大宮御所、明治神宮など一部焼亡したが、跡見女学校では雨天体操場が全焼した。

跡見女学校校舎の被害がもつとも大きかったのは五月二十五日の夜の空襲の時で、B29約二五〇機が来襲、宮城内裏宮殿、大宮御所が焼失、市街地のほとんど全域で被害激甚であったが、跡見女学校では新館（昭和十六年九月築、木造）が全焼、本館の二階、三階および別館三階が外壁などを残して焼失した。空襲当時の様子を宿直だったという伊藤嘉夫は次の様に語っている。

あの夜は中村先生、酒井先生と僕の宿直でした。富士山北方から飛んで来た最後の一機が投下した爆弾が、現在の図書館の窓からとび込んだ。この部屋は栄進社の作業場(四年生)のためガソリンとゴムの部屋に落ちたのですからひとまりもなく火はもえ広がりました。屋上をぬいて三階の廊下に一つ、運動場の榎の木の側に一弾投下されました。宿直の我々は必死。校内の住民は男も女も消火に必死。すでに水もつきはてて気をもんでいる時、寄宿舎通用門の前を一台の消防自動車を通ったところを井上幸子先生がつかまえた。

(『汲泉』復刊一六号)

右の回想に一部出てくるように、爆弾が落ちたという本館二階の教室では四年生担当の学校工場で軍用機「雷電」の補助タンクのゴム貼作業が行われていたが、生徒の必死の努力で仕上げたタンクがその夜の空襲で全焼してしまい、生徒達は悔し涙に暮れていたということである(板谷春子稿「私の体験した戦時下の跡見学園」)。

動員作業従事の生徒が、空襲の犠牲になったと

いう痛ましい出来事もあった。担当していた教員中村崧雄は後年次のように語っている。

私の責任下の生徒でしたが、昭和二十年一月二十七日(土)日頃残業々々で手ごわい作業をしつづけていた為、たまたま仕事のキリがあつたので作業も早くおわらせて、帰途につかせた。榎本和子、阿部いつ子、三浦妙子の三人(いずれも真弓念が国電有楽町駅で空襲にあい(工場は東京宝塚劇場)壕に退避していたのですが、解除のサイレンがなつたので切符を買うため外に出た所に思いもかけぬ再空襲で榎本は爆死、同行していた阿部は足に負傷をおい、三浦は幸いにかい負傷をした。そして二人は九段の病院に収容されたが阿部も其後破傷風でなくなりました。榎本の遺体をさがすため心配しましたが、日比谷公園に居られるという事をつきとめて、そこに行きましたところ納棺されました。遺体を見せられ、正しく本人である事を確認しましたが、爆風にやられてショック死ではないかと思うほど何ら姿にかわりなくやすら

かでした。

(『汲泉』復刊一六号)

にもかかわらずこの知らせを工場で聞いた生徒も  
少なくなかったのである。

## (8) 終戦

首都への空襲が激しくなるにつれて、生徒達も  
日を追って故郷に帰り、あるいは疎開するものが  
増えていった。在籍生徒は昭和十八年(一九四三)  
六月には一四五六名、十九年(一九四四)四月には  
一三九八名を数えていたが、二十年(一九四五)三  
月に東京大空襲のあった直ぐ後の四月には八三七  
名に減っていた(修学年限が四年制になったこと  
も関係するが)。その後も激減し、同年八月の終  
戦時には三〇〇名前後となっていた。

すでに高齢であり病气勝ちでもあったという李  
子校長も、同年三月二十九日に長野県北佐久郡本  
牧村へ疎開した。教員の数も十九年四月には三七  
名であったが、二十年四月には三二名、終戦時に  
は二二名前後となっていた。

このようにして日々激しい空襲の中、校舎も焼  
け学校は火が消えたようになり、焼け残った寄宿  
舎にも生徒は全く居なくなった。

二十年八月十五日、玉音放送により戦争は終つ  
たが、わずかに学園に残った生徒の中で、夏休み